第３回高知市総合計画審議会　議事録

１　日　　時　令和８年９月８日（火）18：00～20：00

２　会　　場　総合あんしんセンター３階大会議室

３　出 席 者

委員　石塚　悟史（会長）、西内　裕晶（副会長）、古谷　純代、松本　明
中屋　優子、森田　美佐、宇都宮　千穂、渡部　淳、宮畠　徳明
澤田　宗佑
※　大槻知史委員、新開祐二委員は都合により欠席

高知市　大宮　剛夫（政策企画部長）
岡　里香（政策企画部副部長）、村永　京介（政策企画課長）、
平峯　真理（政策企画課長補佐）、清遠　佳澄（政策企画課総合政策担当係長）
有城　慶祐（政策企画課総合政策担当係長）、谷村　将生（政策企画課主査）
田内　寛人（政策企画課主査）

４　議事経過

【石塚会長】

本日の会議について、「高知市における附属機関等の会議の公開に関する要綱」に基づき公開の上開催としてよろしいか。（異議なし）。

それでは早速議事の方に入る。

議事①、②について合わせて説明を行い、その後、議事①、②のそれぞれの議題に沿ったご意見をいただきたいと思う。

事務局の方からまず説明をお願いする。

【事務局】

資料１～５及び参考資料に沿って説明。

【石塚会長】

審議を始める前に、本日欠席されている大槻委員・新開委員から事前に審議事項に対する意見が提出されているので、事務局から説明をお願いする。

【事務局】

まず大槻委員からの意見を紹介する。

第３章の４つの「アプローチ」を４つの「視点」に用語変更しているが、「アプローチ」の方が良いのではないかと感じる。アプローチは計画として能動的であり、行政職員が取り組まなければならないこととして認識がしやすい。

第３章視点１は行政が市民と一緒に合意形成をしてやっていきますという「パートナーシ

ップ」の考え方であるので、もう少し「パートナーシップ」が分かるような表現にしてはどうか。

第３章視点３は「ラストワンマイル」を行政がしっかりと埋めてなくすというメッセージを盛り込んだ表現ができるのではないか。

４つの視点（アプローチ）が正常に機能しているのか確かめるために、行政側の自己評価と市民の評価が必要。自己評価は定量的な点検のみでなく、アンケート等も活用した定性評価も行い、市民評価はそれぞれの分野で関わる地域組織（民生委員、自主防災組織等）に対してその分野に対するアンケート調査を行うなど、工夫をしてはどうか。

成果指標について、市民への調査を行う際は、男女や年齢等の属性も同時に取得し、回答分析に深みを持たせることで、市民実感と KPI との間をつなぐ補助線になるのではないか。

「高知市の未来像」について、今のキャッチコピーは「高知」を別の都市にしたとしても、そのままその都市名で使えてしまうので、高知の実態を踏まえたものにした方が良い。

「フェーズフリー」について、現状の記載内容だと、地域だけに浸透させる話にとどまっているように感じる。フェーズフリーは行政のソフト・ハードの部分を含めた広義のものであり、地域コミュニティだけが取り組むものではない。フェーズフリーについての記載は、個別施策の中の一つとしてではなく、もっと大きなレイヤで考える表現にしてもよいと思う。

「地域での支え合い」を論じる際に、「地域同士の支え合い」と「市民同士の支え合い」は別の話として考える必要がある。

以上より、まずは行政が既存の垣根を越えていくということを計画に記載することで、行政もミッションとして行動するし、市民からの評価を確認する仕組みがあれば、本当の意味でのパートナーシップにつながるので、４つのアプローチを行政が行い、市民が評価する仕組みを作ってほしい。

次に新開委員からは、しあわせの柱２「まちの活気と共に、元気としあわせを育てる暮らし」について、いくつか意見をいいただいた。

観光の定義を再構築してはどうか。観光を産業振興や消費額拡大のための「目的」と捉えるのではなく、まちづくりの「手法（手段）」として位置付ける。

観光消費額の最大化を追い求めるよりも、市民が誇りを持ち、訪れる人が心地よいと感じる「住み続けたくなるまちづくり」を優先すべき。

市民の誇りが結果としてその土地独自の空気感やおもてなしを醸成し、持続可能な観光の源泉になるという意見。

アウトプットを追求するよりも、まず、市民が住み続けたいと思えるようなまちづくりをすることで、結果として観光も促進されるという意見。

市民の活気ある暮らしが観光の魅力を育み、観光を通じた賑わいが市民の幸福度を高めるという「相互作用」を、本ビジョンのコアな考え方として打ち出してはいかがか。

天候に左右されない施設整備等も含め、観光客のためだけの場所を作るのではなく、市民の日常生活も豊かにし、かつ観光客も利用しやすい「共生の空間」を増やす視点を強化すべき。

【石塚会長】

それでは、議事①「「(仮称) 高知市未来ビジョン」ベース版についての現状報告」について、各委員の意見を伺う。

【西内副会長】

ベース版に関して３点意見がある。

一つ目は４つの視点について。本資料を市民が見た時に、４つの視点の記載事項について今まではできていなかったのかと捉えられる可能性がある。未来像の実現に向けてチャレンジをするということなので、市民の期待に応えるメッセージが伝わるように、４つの視点の表現を工夫し、チャレンジする姿勢を明確に盛り込むべきである。

二つ目は、資料４の施策に紐づく分野に「交通安全」とあるが、ベース版施策1-4にはその文字が一切なく、具体的に何をどうするのかが見えにくい。生活道路の規制速度が30km/hになったが、今後は道路管理者である市として、それを守るための道路整備が必要である。例えば、歩行空間ネットワークの構築などが必要である。

三つ目は、施策1-6について、資料４の施策に紐づく分野にあるワードがベース版では読み取れない。まずは「コンパクト・プラス・ネットワークに基づく都市形成」や「公共交通を軸としたまちづくり」の方針を明確に示し、その上で、老朽化する生活インフラの更新における優先順位付けなどの記述を整理して盛り込むようにしてほしい。

【澤田委員】

しあわせの柱３において、「インクルーシブな地域」という言葉があり、インクルーシブな社会を実現することは、人権的には大切なことである。

施策の内容として、インクルーシブな社会を実現するためには教育が最も重要だと考える。障がいのある子どもとない子どもが特別支援学級などで分けられることなく、同じ空間で共に学び、生活することが当たり前の社会が育まれていくことが、インクルーシブな社会の実現になる。そのような記載がどこにもないので、まずは教育に力を入れるという部分が抜け落ちていると感じた。

【宮畠委員】

ベース版施策 2-1 の「未来を創るためのアクション」において、「老朽化した農業施設の計画的な更新またはそれに対する支援」とあるが、更新は施設の所有者が行うため、「老朽化した農業施設の計画的な更新に対する支援」という表現に変更する方が適切だと思う。

「中山間地域の多面的機能発揮につながる農業生産活動の推進」という記載について、中山間地域に限定することなく、平野部の水田地帯も含めて多面的機能の発揮を継続させるような書き振りにしてほしい。

また、中山間地域の農業生産活動に関して、多面的機能の発揮だけではなく、「儲かる農業生産活動の推進を図る」という方向性に修正してほしい。

６つのしあわせの柱の表現がイメージしづらい。各施策と結びつきやすく分かりやすい表

現にできたらよいと思う。

【事務局】

「６つの柱」や「しあわせ」というキーワードの表現について、関係各所から様々な意見や指摘を受けており、何が本当に表現すべき本質なのか、より分かりやすくブラッシュアップする必要がある。

６つの柱がそれぞれ完結するのではなく、全体で循環する構造になっている。そのため、柱ごとではなく、1 本につながるショートストーリーで良いのではないかという意見も出ている。最も分かりやすい伝え方にするため、現在の構成や表現のどこが分かりにくいのかを具体的に指摘していただければ、今後の参考にさせていただくので幅広い意見を求める。

【渡部委員】

五つ目の柱について「つながりと愛着で心地よい、しあわせが寄り添う暮らし」とあるが、具体的なところに結びつきにくいと感じる。

また、内容について、コミュニティ、歴史・文化、スポーツ、定住などが、五つ目の柱の中にとりあえず詰め込まれた印象を受ける。これらが相互にどう関係し、市民の生活にどう影響を与えるのかを示す工夫が必要である。

また、施策 5-2 について「ふるさとの歴史や伝統文化を次世代へつなぐ」とあるが、単に残せばいいということではなく、過去の先人たちの蓄積が現在に具現化されており、それを市民が自覚することで安心感が生まれる。もっと視野を広げた文章へ修正してほしい。

歴史や文化を語る際、身近な風景が自分たちの支えになっていることがあるので、「民俗」や「風景」といった言葉を含めると良いと思う。

高知市の文化関連で弱いのは、専門的人材の不足である。施策 5-2 で「専門職の確保」とあるが、確保というよりは、さらに充実させる「拡大路線」というような先を見据えた言葉があると良いと思う。

スポーツや定住の問題なども含め、五つ目の柱の中の関連性をしっかりと整理すれば、自ずと全体的な言葉遣いや書き振りも整っていくと考えられる。

【宇都宮委員】

ベース版の「４つの視点」の中に「垣根を越えて力を合わせること」とあるが、資料３の表は縦割りのイメージがあり、垣根を越えるイメージがしづらい。例えば、日常生活において施策 1-1 と 5-2 はつながっていたりする。他にも移住・定住と高齢者福祉についても、その地域の高齢者支援が充実していることよって、移住促進につながるということもありえる。

施策の垣根を越えた取組を行うという意欲が構造案に見えてくると良いと思う。全大綱を貫く横軸の部分が、未来像の実現に向けたチャレンジ「分野を超えるための視点」と表現すると良いのではないか。

【事務局】

現在の構造案では、施策同士のつながりが見えづらいと思うが、つながりのサンプルを示すなど視覚的に分かりやすくなるような工夫をしていきたいと思う。

【森田委員】

高知市の未来像の「いま、そして次世代へ―しあわせを紡ぐまち　高知」という表現は、高知市民が誰一人取り残されることなく、しあわせになることがイメージできるため非常に良いと感じた。

また、しあわせの柱３について意見を申し上げる。施策 3-5「平和を礎に、人権、多様性、ジェンダー平等を尊重しあう地域社会を実現する」とあるが、平和が全てを包含しているため、「人権、多様性、ジェンダー平等を尊重」はあえて書かなくてもよいのではないかと思う。もし書くなら、「人権、多様性の尊重、ジェンダー平等社会を実現する」というのが良いのではないか思う。

次に、施策 3-5 の「今、向き合うべき現在地」に「女性だから」とあるので「男性だから」も付け加えたらよいと思う。また、「未来を創るためのアクション」２段落目の「男女共同参画では、ジェンダー平等の意識を広め」という部分は、男女共同参画とジェンダー平等は同じ意味なので、「男女共同参画では」を削除してよいと思う。

最後に、ベース版 41 ページ、暮らしの実感項目のしあわせの柱３の部分について、現在の質問項目では、施策 3-4「生涯にわたる学びの機会を整える」という部分が見えないのではないかと感じる。

【中屋委員】

施策 3-1「高齢者が安心していきいきと暮らし続けられる支援体制を整える」という部分について、どういった支援体制を整えていくのか具体的な例があると分かりやすいと感じた。

また、子育て支援について、高知市は十分に支援ができていると感じている。ただ、子育てにはやはりお金がかかるので、財政面の支援がより多くあると、高知市で子育てをしたくなる人が増えてくるのではないかと思う。

【松本委員】

次世代に対しての思いは表現されているが、さらに先の世代、将来世代に対する責任についての記載がないのは少し物足りないと感じる。環境分野に関しては施策 1-5 に記載があるが、この中、あるいは全体の方針の一つとして、将来世代に対するスタンスについての記載があればよいと思う。

国や県など、それぞれの役割がある中で、持続可能な社会を実現するには、地域づくりから始めるという考え方も必要だと思うので、そのような視点からの記載があると良いと思う。

次に、高知市の特性をどのように前面に出していけばよいのかという点について、しあわせという言葉だけでは、他自治体との差異は表現しにくいのではないか。少し視野を広げて、社会全体における高知市の役割は何かという視点からも考えなければならない。高知市単体

で完結する取組だけではなく、県内外の他地域と連携し、取り組む分野を示してもよいのではないか。

次に、チャレンジについて、本資料でのチャレンジは、本来行政が果たすべき役割のうち、十分取り組まれていない部分を補完する意味合いで使われているが、本来のチャレンジの意味は、行政が取り組むべきと考えられてきた範囲を一歩超えた部分にまで手を伸ばして取り組むということではないだろうか。具体的には、視点１では、行政内の部署同士だけでなく、行政外の多様な主体とも手を携えて進めていくという部分はチャレンジに値すると思う。視点２では、行政のリソースだけの話ではなく、地域全体には活用されていない資源が多くあるので、それのマネジメントまで配慮するという記載になればよいと思う。視点３では、聴くだけ、伝えるだけではなく、動くところまで考えていくということ、視点４では、地域の支え合いを外からではなく、一緒に行っていくというような表現があればよいのではないかと感じた。

最後に、しあわせ自体を定義することは難しい面もあるため、しあわせに向かう取組を示したらよいのではないかと思う。「６つの柱」にそれぞれしあわせという言葉は使用しなくてもよく、例えば、安全と快適が守る暮らしをするための活動や方針を表現した上で、それらを実施した結果、市民がしあわせを感じたかをその後の調査で把握すればよいのではないかと思う。

【古谷委員】

女性の人口が増えることで出生率も上がり、また、女性は勤労意欲も高く、就業率も高いと思うので、女性の力は大事だという点について記載いただきたいと思う。

県と市がバラバラに政策を行うのではなく、高知市の発展は高知県全体の発展につながり、県全体の取組が高知市の力になるという意識を持ち、共同で進めていく記載も必要である。

また、計画策定に向けて全庁を挙げて取り組んでいるという本気度は伝わるので、市民にもっと分かりやすく、力強い文言へ修正していただきたい。

【石塚会長】

高知市の 10 年後、20 年後を想像すると、人口が爆発的に増えることは考えづらく、一人世帯は増えていくことが予想される。人は一人では生きていけず、人とつながることで生活や社会、ビジネスなどが成り立っているということを考えた時に、人と人との関係性が広く強固である地域ほど、上手く回っていくと思う。

宇都宮委員から意見があったように、施策の枠組を越えた取組があるような表現を盛り込めたらよいと感じた。

【石塚会長】

それでは、次に議事②「計画の進捗管理及び成果指標設定の方向性について」について、各委員の意見を伺う。

【西内副会長】

個別の行政計画が様々あると思うが、本当にこの高知市未来ビジョンに正常に紐づけられているのか確かめることは可能なのか。

【事務局】

高知市未来ビジョンは最上位計画に当たる。

令和９年度に策定した後に、整合性を図りながら個別計画を順次更新していく流れになることが予想される。

そのため、令和９年度は高知市未来ビジョンの効果が発現する前段階であるため、令和９年度中に新しい指標を確定させ、翌年度以降に基準値をベースとして、伸ばしていく形になると思われる。

【西内副会長】

個別の行政計画が高知市未来ビジョンに正しく紐づけられているかどうかをチェックする必要はあると思う。

また、都市計画に関しては、長期にわたるものであるので、KPI もすぐには決められない。

高知市未来ビジョンでチェックできるものがあるのか、引き続き検討が必要である。

【澤田委員】

市民の意識調査はどのようにして行うのか。

【事務局】

毎年、高知市民の中から無作為に抽出した 3,000 人を対象にアンケート形式で市民意識調査を行っている。その中で隔年であるが、重要性・満足度調査を行っており、既存の調査でも市民の暮らしの実感項目の相当する内容を調査できるが、そのままでは活用しづらい部分もあるので、高知市未来ビジョンに合わせた新たな質問項目を設定し、指標を確認していくことを想定している。

【澤田委員】

行政が想定する「市民」の範囲が、成人かつ障がいのない人に限定されているのではないかという懸念がある。

市民意識調査の対象者が「成人かつ健常者」に偏っていることが残念なので、現状を変えていく必要があると思う。

【事務局】

子ども関連について、「高知市こども・若者まんなかプラン 2026」を作成した際に、子どもを対象にアンケートを行った。障がい者については、どのようにアプローチするのか検討し、一つのアンケートだけではなく、複数の調査を組み合わせる手法など、今後の調査では、高

知市民が誰一人漏れることがないように切り替えていくべきだと考えている。

【宮畠委員】

数字で評価できない項目について、市民にアンケート調査を行い評価することは良いと思った。調査の対象者については、引き続き検討していただき、数字で評価できる部分は数字で評価し、そうでない部分については質問を工夫していただければと思う。

【渡部委員】

高知市文化振興審議会では、市民意識調査の質問項目やまとめ方そのものが、委員の認識とずれているといった話があり、今回を機に市民意識調査を見直したい。

暮らしの実感項目という調査は非常に良いと思う。また、各部署でそれぞれ独自でアンケート調査した回答結果をまとめて、集約することで市民の意識が見えてくるのではないかと思う。

文化の評価について、成果を数字だけでなく言葉でも考える。目標が達成できなくても、課題が見えたことが成果と捉えることができるのはないか。

また、部署ごとに様々な文化的な視点を持つことができ、それにより様々な指標が出てくると思うが、複数部署にまたがるような指標もあると思う。

柱ごとの成果指標だけでなく、柱の垣根を越えた成果指標をチェックできるように工夫をしていただきたい。

【宇都宮委員】

暮らしの実感項目の例を見た時に、回答しやすい指標でよいと感じた反面、やはり縦割り感が否めない。例えば、「子育てがしやすい環境だと感じますか」という質問には、「車の走り方が安全になった」や、「近所の人が子どもの面倒をみてくれた」など、複合的なことが重なり、子育てがしやすくなったと感じるものである。

子育てしやすい環境を市民が要望した際に、どのような対応を行政がとるのか示してあげると良いと思うが、現状は分かりづらい部分があると思う。

また、コミュニティの分野に関して、「地域に属し、近所の人や地域とのつながりがあると感じていますか。」という質問において、「地域に属し」というのは何を示しているのか分かりづらいため、表現を変えた方がよいと思う。

【森田委員】

暮らしの実感項目を見た時に、是非調査してほしいと感じた。

市民として、毎日の暮らしに不安や諦めがないようにするための質問だと思う。

ただし、少し物足りないように感じたので、市民の日常に即した質問があってもよいかと考える。

【中屋委員】

暮らしの実感項目はとても分かりやすい指標だと感じた。

ただし、回答は点数で回答するのか文章で回答するのか気になった。

調査の回答をする際に、文章で書く欄があればよいと思う。

【石塚会長】

市民意識調査の回答はどのようなものをイメージしているか。

【事務局】

現在の市民意識調査では、施策の重要性・満足度を５段階評価で回答していただいている。

各委員の意見を伺い、どうしてそのような評価になったのかも併せて調査していけたら良いと思う。

【松本委員】

主観指標をメインに置くことは、画期的な取組だと思う。

ただし、主観指標を把握するだけではなく、客観指標との関係についても把握していかなければならない。これからは主観指標と客観指標の関係性のデータを蓄積し、それを研究していくこと自体を施策の柱にして取り組むことが重要だと考える。

また、「ごみの分別・減量や節電など、環境に優しいことを行っていますか」という質問について、環境に関する質問だけ、「感じていますか」ではなく、「行っていますか」になっている。主観ではなく活動を把握する形になっているので、他の質問との整合を図ることが必要である。

次に、施策同士の関係性についても段階的に把握をしていき、指標とは別で管理をしていく必要があると思う。

【古谷委員】

市民意識調査は毎年同じ質問を行うものか。

【事務局】

結果の比較や定点観測を行うために質問項目の継続性を重視している。毎年同じ質問を続けるものや、隔年でローテーションするものなどバランスを調整しながら運用している。

対象者は毎年高知市民の 18 歳以上の 3,000 人を無作為に抽出し調査を行っている。

【古谷委員】

無作為ということは年によっては、対象の世代に偏りがある場合もあるということか。

【事務局】

無作為抽出ではあるが、年齢層や性別、地域に偏りがないように調整している。

【西内副会長】

暮らしの実感項目について、主観的な質問になっているため、回答を得られた結果、その結果が何を意味しているのかの解釈が難しいことが懸念点である。

主観的指標を前面に出す方針転換は画期的だと思うが、客観データとの整合性の解釈を誤ると何のデータか分からなくなる可能性がある。

主観的な指標だけにこだわるのではなく、あえて、縦割りに戻り客観データの情報収集も行い要因分析をする必要もあると思う。

【石塚会長】

これまでの「積み上げ方式」から、「高知市の未来像から逆算して今やるべきことを決める」という手法へ変更しており、意識改革を含めて非常に大変な取組であると感じる。客観的な視点と主観的な視点をもって評価することは良いと思うが、先程話があったように、何のための視点か、どのように活かされるのかを明確にする必要がある。

来年度から高知市未来ビジョンが施行されるということで、この短期間で完璧なものを作成するのは難しいかと思われるが、その時の状況に応じて修正が可能となっていると思うので、まずは確実に確認すべき点をリストアップすることが重要だと考える。

【宮畠委員】

横文字の言葉が多く見受けられる。市民に分かりやすい計画とするには、日本語で表現できる部分は日本語で示していただきたい。

【事務局】

次回の審議会は 12 月 3 日を予定している。次回は、イラストを配置し、より分かりやすくレイアウトを整えた完成形の高知市未来ビジョンを確認いただきたいと思う。

本日の議論で出た意見も検討し、後日共有させていただく。引き続きよろしくお願いする。